

ひかりのこ

10月園便り

聖ミカエル幼稚園
2014年9月25日

『いつまでも変わらないもの』

あれだけ30度以上が続いた日々がうそのように、最近は最高気温が20度を下回る日が増え、あっという間に秋が、そして冬が北海道にやってきます。年を取れば取るほど、季節がとて早く変わっていくようで、寂しいものです。でも、子ども達と接していると、季節の変化と共に子ども達の成長を見ることができるので、寂しさも吹っ飛んでしまいます。

去る9月6日、土曜日、皆様のご協力のもと、幼稚園の60周年行事を無事と行うことができました。ソプラノ歌手の小貫多喜子さん、ゴスペル、マザークロスのお母さん方、日曜学校子ども聖歌隊、園児たち、教会手話の会、みんなの歌声が礼拝堂に響いて、とても素敵な温かな音楽会となりました。ありがとうございました。幼稚園にとっても、長いようであっという間の60年です。

私は東区で生まれ、このミカエル幼稚園に通い、美香保小学校、美香保中学校、札幌北高、教育大学札幌分校を卒業し、札幌の中学校で27年間教員をしていましたので、生粋の札幌生まれ、札幌育ちです。札幌市も私の子どもの頃から見ると、大きく変化しました。私がミカエル幼稚園に通っていた頃は、今は2車線になっている北17条と18条の間の道路は細い砂利道でしたし、空き地があちこちにあり、私も兄や近所の子と一緒で野球をしたり、めんこで遊んだり、ゴムなわとびなどをしたものです。めんこは相手の札をひっくり返すと自分のものにできる遊びです。よく兄に、「本気か?」「うそんか?」と聞かれ「本気…」と答えるとあっという間に自分の札をひっくり返されて、取られてしまいました。兄は近所でも強かったのか、段ボール一杯にめんこを集めていました。(今ならうちの子のおもちゃを取られた!と大問題になりそうですね。)次こそは取られないように、私も必死で練習したものです。今の子ども達は、近所の子と年齢を超えて遊ぶことがあまりなくなり、地域によっては放課後の公園ががらんとし、子ども達は塾に行ったり習い事したりして忙しいようです。また、子どもの連れ去り事件もニュースで聞くことが多くなり、外で遊ばせる不安もあります。子ども時代はのびのび遊び、友達と仲良くしたり競い合ったり喧嘩をしながら、生きる知恵や人と協調する力を学んでいくものですが、のびのびとは、なかなかいかないのが現状です。

この点で、幼稚園の役割は重要であると思います。聖ミカエル幼稚園は、のびのび遊ぶことをとても大切にしています。また、縦割り保育、横割り保育両方を行うことと、たくさんの先生たちにかかわることによって、いろいろな人と協調できる力を身に付けていきます。いくら時代が変わっても、私が幼稚園児だったころからそれはかわりません。昔は、基本クラスは同年齢クラスでしたが、学年みんなで集うことが多い幼稚園でした。そして、いつもののびのび遊んでいたことを思い出します。

60周年の次は70周年。10年間で世の中はどのように変わっていくことでしょ

う。しかし、時代は変わっても、子ども達の成長にとって一番大切なことはそう変わらないと思います。聖ミカエル幼稚園が、何が大切なことなのかを、いつも見極められる園であり続けるよう、心にとめていきたいと思っています。

園長 渡部良子

月主題：きもちがいいね

- ・友だちとともにいることを喜び、体を動かすことを楽しむ
- ・季節の移り変わりを感じ、身近な自然とふれ合う
- ・試行錯誤し、工夫することを楽しむ

キリスト教保育

私は中学2年まで北区で過ごしました。出身校は白楊小、北陽中です。こう書くと自分の歳を感じますが、当時はまだ馬車や馬そりがあり、春には馬糞風が舞いました。車はめったに通りません。至る所に原っぱがあり、こどもは皆、暗くなるまで外で遊んでいました。高学年になると自転車で足を伸ばし、北大の中を探検したり、丘珠空港周辺の果てしない「原野」を走り回りました。もともと札幌は、しっとりとしていながら自然の厳しさを感じる不思議な魅力のある街でした。それが札幌オリンピック(1972年)の頃から、がらっと変わった気がします。家の近くに「こども広場」という遊び場がありました。ここは町内会長でもあった地元の電気屋のおじさんが、近所のこどもたちのために整地、開放した場所でした。夏の朝はラジオ体操の、夜は盆踊りの会場にもなりました。特別な遊具もなく、かろうじて三角ベース程度の球技ができる細長いグラウンドです。私たちは放課後に少しずつ集まり、人数と学年の構成に応じて何をして遊ぶかを決めました。今でも感心するのは、その都度、仲間はずれが出ないような遊びを選び、学年の体格差がある時はハンデをつけるなどの工夫をしていたことです。大人から教えられたのではなく、こどもの社会の中でいつの間にか考えついたルールでした。中学生になると、少しずつ「こども広場」に集まらないこどもが出てきます。当時は今ほど塾通いのこどもは多くありませんでした。しかし、さすがに私たちは遊びの中で友達に勝つのではなく、学校の成績で負けないことを意識し始めたのです。今思えば、成績上位の子から先に、「こども広場」を卒業していきました。そして、最後まで残った中学生が私でした。電気屋のおじさんにもう一度会うことができるなら、満足に言えなかったお礼を言い、「広場」に託したいを聞いてみたいと思うこの頃です。

チャプレン 司祭 下澤 昌